

1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	4270103551		
法人名	株式会社アイ・エル・エス		
事業所名	グループホームありすの家2F		
所在地	長崎県長崎市椎の木町25番19号		
自己評価作成日	平成 31年 3月 8日	評価結果市町村受理日	平成 31年 3月 29日

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	http://www.kaigokensaku.mhlw.go.jp/42/index.php
----------	---

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	特定非営利活動法人 ローカルネット日本評価支援機構
所在地	長崎県島原市南柏野町3118-1
訪問調査日	平成 31年 3月 20日

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

心をつにし、人と人との関係、信頼関係を第一に考えるホームです。家族と離れて暮らす寂しさや不安を職員が家族のような関係で支えながら、日々喜び合い、笑い合い、助け合って心穏やかに過ごしていただいています。入居者が心を開いて何でも職員に話をすることができるよう、家族がどんなことでも相談できるよう、馴染みの環境をつくることも大事にしています。自立された方が多い中、日常生活にできることはたくさんあります。できる事を一緒に、遊びも楽しい事も一緒に、つらい時は励ましあって、一人ひとりの思いを汲み取りながら、寄り添ったケアに取り組んでいます。

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

長崎市郊外にある当ホームは、高台の開放的な風景が望める場所に立地している。ホーム内は入居者が職員とともに毎朝清掃を行い、常に清潔が保たれている。ホームでは入居者自ら食事の準備や配膳・下膳を行うほか、職員とともに食器を拭き上げるなど入居前からの習慣を継続して行う残存機能を活かした支援がなされている。職員はできるだけ経口摂取できるよう、小食の入居者にもできる限り食べていただけるような言葉掛けやスキンスリップを図っており、楽しく食事ができるよう工夫されている。レクリエーションに参加することが苦手な入居者や居室で過ごす時間の長い入居者についても、個人の性格や能力に応じてその方が楽しみながらできることを個別に実施するなど、マンネリ化しないよう工夫している。ホームイベントの際には職員が手作りの衣装を作製し、よさこいや歌・踊りなどの披露に向けて練習を重ねるなど、入居者の喜びへと繋ぐことができるよう取り組んでいる。創意工夫されたホーム独自の入居者への支援に、今後も期待が持てる事業所と言える。

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1~55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印		項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印	
56	職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	<input checked="" type="radio"/>	1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらい 3. 利用者の1/3くらい 4. ほとんど掴んでいない	63	職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)	<input checked="" type="radio"/>	1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
57	利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	<input checked="" type="radio"/>	1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64	通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)	<input checked="" type="radio"/>	1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
58	利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	<input checked="" type="radio"/>	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65	運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが拡がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	<input checked="" type="radio"/>	1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くいない
59	利用者は、職員が支援することで生き生きとした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	<input checked="" type="radio"/>	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66	職員は、生き活きと働いている (参考項目:11,12)	<input checked="" type="radio"/>	1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
60	利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	<input checked="" type="radio"/>	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67	職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	<input checked="" type="radio"/>	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
61	利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:30,31)	<input checked="" type="radio"/>	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68	職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	<input checked="" type="radio"/>	1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
62	利用者は、その時々状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らせている (参考項目:28)	<input checked="" type="radio"/>	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない				

自己評価および外部評価結果

ユニット名
グループホームありすの家2F

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
I. 理念に基づく運営					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	「心をひとつにし、信頼関係を大切にします」 「生活の中に生きがいを見つける事ができるよう支援します」という2つの理念を掲げている。 入居者と職員が共に生活する中で心が一つになれるよう目指している。	職員はホーム理念に基づく各入居者の状況に応じた目標を半年毎に立て、目標に沿った支援の実施や確認・振り返りを行うとともに、次回目標の立案に繋げている。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	地域住民の一員として自治会に加入している。民生委員を通じて地域住民の方々が気軽に声をかけてくださったり、また、地域の方の施設見学や、入居相談等も増えている。	地域とは入居者との散歩の際に近隣住民と気軽に会話を交わしたり、地域住民の畑で採れた野菜の差し入れをいただいたりするなど、繋がりを築かれている。運営推進会議メンバーである民生委員がホームの運営に関して協力的であり、民生委員の協力のもと地域との繋がりを得ている。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	推進会議の中で、地域の方々からたくさんの認知症についての質問を受けている。ホームの理解を深めると共に、認知症への理解も深まるようわかりやすく説明させていただいている。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	2ヶ月に1度行われる会議の中で、入居者の現状や、ホームの取り組み等をわかりやすく説明し、質問に答えながら幅広い内容の報告をしている。意見やアドバイスをいただくこともあり、サービスに反映できている。	運営推進会議ではホームから入居者の状況や実施したことについて報告を行っており、会議の出席者からは意見や質問を受けるなど、活発な会議がなされている。ホームでは入居者の日頃の様子を撮影したDVDを会議出席者に鑑賞していただき、ホームの取り組みの理解へと繋げている。	
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くよう取り組んでいる	推進会議に地域包括支援センターの職員の方の参加があり、ビデオを観ていただきながらホームの実情や取り組み内容をお知らせしている。ホームを知ってもらうことで、入居相談等もいただくようになってきている。	管理者は運営推進会議メンバーである市職員や地域包括支援センター職員との関係構築に努めており、市担当者には生活保護についての相談などを行っている。地域包括支援センター職員からは入居待機者の受け入れの問い合わせがあるなど、良好な関係が築かれていることが窺える。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者及び全ての職員が「指定地域密着型サービス指定基準及び指定地域密着型介護予防サービス指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	身体拘束を行わない事を原則に介護にあっている。玄関の施錠においては、不審者等の防犯上の問題がある為、通常から開錠はしていない。	ホームでは3か月に1回身体拘束委員会を開催し、その後全職員への内部研修を実施しており、ホーム全体が身体拘束の弊害について理解できるよう努めている。ホームフロアと台所の境の壁にはスピーチロック(言葉による拘束)について注意喚起した文書を掲示しており、職員の言葉遣いが適切か否かを常に振り返ることができるよう取り組んでいる。	
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	虐待に関する研修を行い、高齢者虐待防止法についての理解を図っている。見過ごされがちな言葉による虐待についても常に確認ができるよう、ホーム内に掲示をしている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	成年後見制度を利用している入居者が数名おり、後見人との関係の中で様々な事を学んでいる。後見人と保佐人の違い等、理解を深める良い機会となっている。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約また改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	契約時には重要事項説明書、契約書、金銭管理や個人情報の保護等について説明し、理解、納得した上で同意を得ている。疑問や不安事にはその都度答え、解決している。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	入居者や家族等から意見や要望があった場合は、早急に施設全体で話し合い、運営の向上に繋げている。家族との関係性を大切に、遠慮のない話ができるよう心掛けている。	ホームでは家族の希望や意見について直接聞き取りを行っており、要望等には必要に応じた対応がなされている。入居者や家族から知り得た情報については記録し全職員で把握するとともに、その内容に応じて職員間で迅速に話し合い、改善策を講じている。	
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	代表者や管理者は常に現場を見守り、日頃から職員が話しやすい関係づくりを大切にしている。現場で職員が働きやすい環境を意見を聞いてからの話し合い、反映にて実現している。	ホームでは、職員が各入居者の特性に合わせたレクリエーションを考案・提案しており、運営に職員の意見が反映されていることが窺える。全体で行うレクリエーションが苦手な方や居室で過ごす時間の長い方については、個人の性格や能力に応じて机上で可能なレクリエーションの支援を行っており、マンネリ化防止に努めている。管理者と職員の信頼関係も構築されており、休暇については職員の希望に応じた勤務シフトが作成されている。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	代表者や管理者は職員と一緒に入居者と過ごし、現場の状況を把握している。職員の得意分野、苦手分野を理解し、得意分野を活かして仕事にやる気をもてるよう導いている。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	職員の能力に応じて、知識や技術が習得できるようにしている。新人の職員に対し、役職を持った職員以外の職員が指導をする機会を作る等、人を指導する中で成長できている。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	地域ケア会議に出席させていただき、多職種の同業者と交流を持つ機会がある。また、入所相談や入所時の面談訪問により、施設に向くこともあり、良い関係づくりができる事もある。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
II. 安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	入所前に必ず本人との面談を行い、本人の現状を十分把握した上で本人の思いを聞き、入所への不安を解消できるよう努めている。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	入所申込みの相談やホーム見学時に困っていることや不安に思っていること、望む生活等を聞き、入所後は密に連絡を取らせていただき、信頼関係を築いている。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	相談時に本人や家族から情報収集を行い、本人に必要な支援は何かを一緒に考えている。場合によっては、他サービスが必要になるので、居宅介護支援事業所や地域包括支援センターに繋いでいる。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	入居者がお世話をされる一方にとどまらず、お互い助け合い、励まし合い、協力しながら生活をしている。		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	家族とは常に良好な関係を築けるよう努めている。自分で上手く話ができない方の面会の際には職員と一緒に入り、本人の様子をつたえたり、本人の気持ちを代弁している。		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	本人と家族に最初に確認をした上で、友人、知人の面会を行っている。面会等が長く途切れている時には、電話で様子をつたえながらさりげなく訪問していただけるような声かけをしている。	職員は、入居者から馴染みの場所へ行きたいとの希望があれば外出に同行している。また、2週間に1回家族同行で教会に出向くなど、入居前からの馴染みの場所や人との関係を継続できるような支援に取り組んでいる。	
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	入居者同士の関係を十分把握し、部屋の出入りや食堂の席、交流の場面等配慮しながら行っている。また、トラブルを未然に防ぐよう交流の場面では職員が必ず見守りを行っている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	入院による退所の際には病院へ面会に行き、様子を見に行くこともある。家族の支援が十分行えない場合は退所後も職員が必要な対応をしている。		
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	思いを上手く伝えることができない入居者が殆どなので、日々の関わりの中で	ホームの現状では思いを上手く伝えることができない入居者が多く、意向の聞き取りが困難なケースがある。職員は日頃の会話から入居者本人の思いを汲み取り、その方らしい生活ができるよう日々の支援に努めている。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	入所前の本人や家族の聞き取りだけでは把握できないので、入所後も普段の会話の中から聞き取ったり、本人でわからない部分は家族の訪問時に話を聞いて情報の把握に努めている。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	生活の中での入居者の行動や発言の気づきを記録にとどめている。記録や職員の伝達の中から状況を把握し、随時ミーティングを開き、情報を収集している。		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	改まってどのような暮らしをしたいのかを尋ねられると答えに困ってしまう入居者や家族もいるので、本人や家族が話しやすい職員が普段から思いや意向を聞き、介護計画に反映している。	職員は入居者との日頃の会話や家族面会時の会話の中から希望や要望等の意向の聞き取りを行い、記録に残している。ホームでは、その記録をもとにケアプランの見直しや介護目標の設定に反映している。	
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	個別記録に日々の様子や普段と違う変化等を職員が記入し、職員間で伝達しながら状況を整理し、現在の状況を十分把握した上で見直しを行うようにしている。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	入居者や家族の状況の変化に応じてサービスが選択できるよう、相談を受けた際にはホームとしてできることは協力している。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	地域の民生委員に地域の情報をいただきながら、地域住民の方々の協力を得ながら、入居者、職員共に安心して暮らす事ができている。		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	ホームのかかりつけ医により定期的な往診、緊急時は24時間対応をいただいている。入所前からの医療を希望される方は基本的に家族対応をお願いしている。場合によっては、職員が受診介助の支援もしている。	ホームでは、内科については24時間対応の提携医を主治医としている。主治医は入居者の身体状況を把握し、入居者一人ひとりの状況に合わせて往診にて対応することも可能となっている。他科への受診については基本的に家族同行としているが、できない場合には職員付き添いにて対応されている。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	週2回の主治医の往診時には看護師も同行しているので、常に状況の伝達ができおり、相談している。また、非常勤の看護職員に、身近な相談事ができアドバイスを貰っている。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている	入院時は受け入れ先医療機関に必要な情報提供を行うとともに、家族、病院関係者と密に連絡を取り合いながら早期退院に努めている。		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	主治医の判断により、医療処置及び医療行為を必要とする場合入院又は入院が長期化する場合は退所となることを入所前に説明し、理解していただき契約している。重度化していながらも、医療行為が必要となるまで、ホームでできるだけ支援している。	現在ホームでは入居者への看取りの支援は行っていない。看取りについては入居時に入居者本人や家族に説明を行い、納得を得た上で入居していただいている。看取り期に関しては主治医の判断に委ねている。	
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	急変や事故発生時の対応についてマニュアル化し、職員に周知徹底している。ホームのかかりつけ医と緊急時の対応を相談し決めている。		
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を日常的に防火管理及び消火、避難訓練等を実施することにより、全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている。また、火災等を未然に防ぐための対策をしている	職員全員が入居者と一緒に実践に即した避難訓練を繰り返し行っている。定期的に水消火器を使った消火訓練、通報訓練も行っている。自力で歩行が困難な入居者の避難方法を確立し、どの職員でも対応できるよう技術の取得をしている。	ホームでは毎月の自主訓練や消防署立ち会いの訓練を実施しており、有事の際には各職員が適切に行動できるよう繰り返し訓練を行っている。初期消火に関しても火元へ消火器を向ける秒数を声に出して数える等、真剣な取り組みが窺える。	管理者は自治会の役員に向けて地域住民の避難訓練参加について度重なる依頼を行っているが、実現できていない現状にある。まずは身近な地元消防団等への協力を依頼し、災害対策についても地域住民との協力関係ができることに期待する。

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	入居者一人ひとりに応じた、接し方、言葉の遣い方をしているが、その言葉かけが入居者の人格を損なうものになっていないか、職員同士で確認している。また、目に見える場所に接遇を掲げ、常に意識している。	職員は各入居者の性格や生活歴を把握し、尊厳を念頭に置いた個別の接し方・言葉掛けを行い、不適切な対応が行われていないか職員間の客観的な視線で互いに確認し合うよう努めている。入居して日が浅い入居者の不穩に対して、本人を制御せず職員自身が本人に近づき寄り添うことで落ち着いた生活が送れるようになった経緯が窺えた。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	普段から本人の思いの把握に努め、本人の希望をかなえている。職員が決めるのではなく、必ず入居者に意思の確認をし、物事を行うようにしている。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	一日の流れは基本的に本人が決定できるようにしている。一人で過ごす時間を好む方、誰かと一緒にいないと寂しい方、それぞれのペースを尊重しながら過ごしている。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	着替えのある時は、本人が着る服を選び、選ぶ事ができない方は職員が本人の意見を聞きながら選ぶようにしている。身だしなみを気にかける方は職員が付き添い、顔そりに行くこともある。		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	入居者の好みや苦手なものを把握し、調理をしている。食事の準備を手伝ってもらったり、食後は食器拭きやテーブル拭き等入居者の持っている意欲や能力を見ながら対応している。	ホームでは入居時に嗜好・アレルギー調査を行っている。入居者は配膳や下膳のほか、食器拭きやテーブル拭きなど個人の能力でできることを役割としており、やりがいを感じることに繋げている。食事の際にはバイオリン演奏のBGMを流し、雰囲気づくりに考慮した食事の提供に努めている。	
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	食事摂取量や水分摂取量を記録し、職員が情報を共有できるようにしている。小食な方は残してしまうより、完食できる喜びを感じていただけよう、食事の量を調整している。食事摂取が困難な際には主治医に相談し、対応している。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	口腔ケアの重要性を十分理解した上で毎食後に必ず口腔ケアを行うよう声掛けをしている。不十分な方は職員が仕上げの手伝いをし、できない方も洗面所で職員が行うようにしている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	排泄チェック表を通して入居者一人ひとりの排泄パターンを把握した支援を行っている。排泄の失敗で本人の自尊心が傷つかないよう、声掛けや下着類の選び方等に配慮し、手伝いが必要な方には必ず付き添っている。	職員は各入居者の排泄パターンの把握に努めており、排泄の際には声掛けや誘導を行い、トイレで排泄することができるよう支援に努めている。ホームでは現在、ポータブルトイレを使用している入居者はおらず、排泄の自立に向けた支援に取り組んでいる。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	食事内容、水分摂取量を見直し、自然排便に繋がる工夫をしている。また、日常的に適度な運動を行っている。本人の身体状況に応じて自然排便が困難な場合は、主治医と相談しながら本人に合った薬で様子を見ている。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めず、個々にそった支援をしている	入浴の順番や入浴時間等、本人の希望に沿った支援をしている。入浴後に笑顔が見られるよう、急がずゆっくりと心地よい時間になるよう配慮している。	ホームでは、入居者の希望や体調に応じた入浴支援を行っている。順番に拘る入居者はいないが、湯温については希望に応じて足湯や足し水で調整している。状況・場合によっては職員2人で介助しており、入居者が安心して気持ち良く入浴できる工夫がなされている。体調不良や本人の希望で入浴できなかった場合には、代替で翌日に実施できるよう準備されている。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	入居者一人ひとりの生活リズムや体調を個別に見ながら休息をとってもらおうようにしている。夜間の安眠に繋がるよう、日中の過ごし方を工夫している。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	職員が薬の目的や副作用、用法、用量を把握し、入居者の状態の変化があればすぐに主治医に連絡し、調整するようにしている。誤薬防止の為に、薬を渡す際に必ず名前を読み上げ、飲んだことを確認した職員が服薬チェック表に記名している。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	入居者それぞれの経験や得意分野を発揮できる場面を作り、本人の自信に繋げている。コーヒーを好まれる方も多く、ティータイムは楽しみの一つとなっている。		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	ホーム全体で外出する機会を設けている。敬老会やクリスマス会では車椅子の入居者も職員が全員バスに乗せ、少し遠出をしている。会場で催し物をみていただき、食事もしている。また、家族との外出も積極的に行ってもらい、刺激を持ってもらっている。	昨年末伊王島の会場で行われたクリスマス会では、宴会形式の会食や職員の多彩な出し物が披露された。クリスマス会での食事は入居者の食事形態に応じた提供がなされ、様々なメニューを楽しく美味しく食べることができている。2ユニット全体での外出支援では事前の打ち合わせ等を行い、入居者が安心して外出できる支援に努めている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	お金や財布を持っていないと、不安に思われる方もおられるので、本人の状態に応じて所持している。外出時に好きなものや家族への贈り物を購入するときには自分で支払いができるようにしている。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	電話や手紙等、本人の希望に応じて支援している。電話をかける場合は、事前に家族に可能な時間帯を確認し、家族の負担にならないようにしている。		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	室内は落ち着いた色合いで統一している。フロア内に必ず季節の物を取り入れ、温度や湿度にも気を配っている。各居室、トイレ等、にこの面でも不快にならないよう、換気をこまめに行っている。	ホームフロアには敬老会やクリスマス会で撮った写真を飾り、楽しかったことを思い出せるよう配慮されている。また、桜の咲く季節に合わせて紙で手作りした桜の木を飾るなど、季節を感じることができる工夫が窺える。入居者が職員とともに清掃を行うなど、家庭的で生活感のある暮らしを感じることができた。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	階段の踊り場のソファを設置しており、周りから見えないようになっているので、独りで静かに過ごしたい時でもゆっくりとできるスペースになっている。また、リビングにはソファが2つあり、ダイニングの椅子も長時間座っていられるものを使っている。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	本人のお気に入りのもの、使い慣れたもの等を持ち込んでいただき、入居後、生活をしながら、自分が寛ぐことのできる部屋づくりをしている。ソファを居室に置くことで、リラックスして過ごすことができている。	ホームでは毎朝入居者のほとんどが自室の手すりやドアの拭き掃除を自ら行うなど、入居者一人ひとりが拘りを持って清潔保持に取り組んでいる。本人ができない場合は職員が掃除し、清潔保持に努めている。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	本人の生活の様子をよく観察しながら、「できるよう」「わかるよう」になる工夫をしている。昼夜で建物内の雰囲気が変わってしまうので、職員間で情報交換をしながら変化に対応している。		